開館式典

平成20年４月12日（土）午前10時より

90名の皆様の参加のもとに開館式典が厳かに執り行われました。はじめに島本町 川口町長、島本町議会 平井議長、島本町教育委員会 星野教育長、大阪府教育委員会文化財保護課長 冨尾 昌秀氏の４名の皆様によりテープカットを行いました。

次に、主催者挨拶として島本町長、来賓祝辞として町議会議長、大阪府教育委員会文化財保護課長様より、温かいお祝いや励ましのお言葉を賜りました。祝電披露に続き、「おとくに雅楽会」の皆さんによる舞楽「蘭陵王」を、雅楽の演奏とともにめでたくも力強く舞っていただきました。そのあと資料館の展示概要説明と見学・案内をさせていただき、式典終了後、11時30分より一般公開といたしました。

開館記念講演　「天平の時代と島本」

平成20年４月19日（土）
講 師 水 野 正 好 氏

今日は、古い時代から天平時代までの島本町の様子をお話したいと考えております。古い時代は都が大和にあり、平城京の前は藤原京。その前は飛鳥京。より古い４世紀の頃は「上ツ道」「山辺の道」沿いに都が見られ、天皇の陵墓も作られています。同時期に高槻市に弁天山古墳、乙訓郡に恵解山古墳。向日市に元稲荷古墳、山城町に椿井大塚山古墳といった皇族の古墳があります。これらの墓は130m～250mもある大きな盛土の墓です。当時、難波津と大和を結ぶ淀川水系が大切にされていたのです。鎌倉～江戸時代も物資を運ぶときに浅い大和川では運びにくいので、淀川・木津川を使っています。淀川が大きな意味を持っていたのです。ところが変化が生まれます。４世紀末、日本は新羅との戦いに勝ち、貢物として大量の馬や鉄が来ます。この馬で交通体系が一挙に変わります。馬により運搬、情報の伝達スピード化が計られ「馬の道」にふさわしい直線道路が作られます。上町台地には道路の整備が完成し、応神・仁徳・孝徳・聖武天皇の都が移ってきます。大阪の上町台地の先端 - 天満八軒屋に迎賓館が造られ、中国・朝鮮半島の使節を迎えていました。都が上町台地に造られると天皇の

陵墓も大阪へ移ってきます（古市・百舌鳥古墳群）。淀川水系よりも大和川水系や道路網が新たに使われ奈良への道になるのです。天皇の政策によってこのように変化するのです。４世紀前半、摂津三島、山城乙訓に古墳群が造られますが、４世紀後半から５世紀には古市・百舌鳥古墳群や玉手山古墳群が急速に生まれます。しかしこの島本町には古墳はほとんどありません。これ大事なことです。ないと言うことが大事なのです。なぜか。それはこの地が「公」的な地、国家が直接管理する「淀川渡船・渡橋」の地であり港津の地として、また山陽道・西国道など諸道合流の交通の要所として国家が管理する地、豪族には任せられない地であったからです。

茨木市に継体天皇陵とされる大古墳があります。江戸時代、継体天皇陵に定められましたが調べると継体天皇の時代より100年古くなり、違うことが判りました。今では高槻市の今城塚古墳が相応しいとされています。この継体天皇は６世紀淀川水系を再開発して三川合流の場所に都を造りました。楠葉、綴喜（筒城）、乙訓宮がそれです。この時代が一番大事な時代ですね。この島本町は摂津国の一条一里の地です。山崎橋、山崎の渡しなど皆並びます。交通が多く、人々の一番賑やかなこの南北・東西の道がある。奈良から人は田辺の山裾を通り、大阪の人は交野の山裾から枚方へ出て淀川を渡る、国家の最も大事な道が再び息づいたのです。そういうところには墓は造らないのです。私的な目的には使わないのです。この山崎の駅には、30匹の馬が常備されていたといいます。こうした事実を挙げますとこの地の大事さがわかります。宇治には有名な平等院があります。その向かいに宇治の大橋が架かっています。この橋を架けた方は道登上人、その橋が流された後再架橋したのは飛鳥寺の道昭上人です。川の水量は多く、橋のない時は溺死する人が多く、人々は苦しんでいました。道登、道昭はそうした人々の苦しみに対応した宗教家でした。これによってたくさんの人が助けられ喜んでいる。道昭は遣隋使として中国に渡り、三蔵法師の許で学んでいます。法師は道昭を見て、素質を見抜き彼を重用します。後継者にしたいと考えていたようです。天皇が送った遣唐使が日本に帰国するよう要請し、道昭は玄奘三蔵に伝えます。法師は自分が訳した経典の全てを一部づつ彼に渡し日本に持ち帰らせます。師の玄奘は日本に初めての正しい訳をもつ経を託し、天皇は驚喜します。三蔵は、仏教は人を救済するためにあると考え、写経事業の他に福祉事業を積極的に展開します。その姿を見て帰国した道昭も同様、写経や救済事業に精を出します。この道昭の弟子が行基菩薩です。天平の時代は華やかな時代ですが、一方には食にこと欠く人、疫病に苦しむ人がたくさんいました。そうした人々に呼びかけ淀川の改修工事や架橋工事、港の整備、橋・開田や灌漑そうした事業に人々と共に取り組みます。人々は菩薩として彼を崇めます。行基菩薩にとって、救済事業は仏教的な大土木事業に支えられて進められていくのです。聖武天皇が行基菩薩の活動を聞き、素晴らしい人ではないかと思い、インドから来ていた菩提僊那（せんな）上人や高僧良弁とも相談、行基に恭仁（くに）京の前に流れる木津川に橋を架けるように依頼、体の悪い人たちも加わり土を運び、木を引かせて、行基は寄進財と人々の協力でこれを完成させるのです。天皇はそうした人々の姿を見て感激し財力はあっても、仏教を押し進めてもそうした庶民は救えない、病気の人も救えないのに、ひとりの僧でしかない行基が万人の心を掴んで悠然と架橋していく、その聖なる心により集まる人々の想いに感動するのです。後に奈良の大仏を鋳造しようと決心した時、聖武天皇は「天下の富は我にあり、天下の勢い我にあり。され

ど大仏を造るにあたってはこれを国民に訴え国民の力を得て大仏を造りたい」と詔しました。行基菩薩にとって大仏鋳造よりも大切なことは多くの苦しむ民を救うことですから、そうした人と共に大山崎・島本に山崎橋、山崎の渡しを作るのです。道昭の橋が流れたといっては、行基はそれを宇治川で再興する。そしてその橋の口には阿弥陀を祀る仏堂を建てます。山崎には山崎院が造られます。数年前、大山崎で発掘しましたら寺堂の跡から壁画片がいくつも出ました、あの山崎院です。行基の後そうした活動が広がり、この地域が東大寺の荘園（水無瀬荘）になります。東大寺にとってはこの地は非常に大切な荘園です。東大寺に必要な銅や米塩、木材、布などが運ばれる。運船がこの荘園の港に着くのです。天皇領であります。東大寺造営、大仏殿建立と言う度に東大寺に大きな影響を与える地なのです。対岸の「楠葉の渡し」も河内の人たちにとっては、舟で渡る重要な地であったわけです。高槻の金龍寺に詣でて西方浄土に赴く夕陽を眺め、枚方中宮、渚の百済王家の華やかな女性の活躍や異国の光を河面に映しながら船の通う大事な場所だったのです。大阪、京都、奈良、滋賀を結ぶ大河を目の前にしたこの島本の町は古代の経済・文化の大切に息づく場所であったといえるのです。この地域の文化や景観を大事に守りその情緒溢れる町として生き続ける方策が今後もとられるよう皆様にお願いする次第です。ご静聴ありがとうございました。

開館記念コンサート

平成20年５月18日（日）午後２時より

「カルテット ヴォルフィ」の皆さんをお迎えして、弦楽四重奏の調べで新緑の午後のひと時を過ごしていただきました。「カルテット ヴォルフィ」は、京都市立芸術大学音楽学部教授で日本を代表するヴァイオリニストでもある久合田 緑さんを中心として、セカンドヴァイオリン 池川 章子さん、ヴィオラ 大西 秀明さん、チェロは飯田 精三さんと様々な経歴をお持ちの３人の奏者が集まって結成された弦楽四重奏団です。

演奏曲目は、モーツァルトの弦楽セレナーデ ト長調 K525「アイネ クライネ ナハトムジーク」と、ドヴォルザークの弦楽四重奏曲 ヘ長調 作品996「アメリカ」でした。著名な演奏家による演奏と開館記念ということもあって204名もの皆さんに来館していただきました。準備した椅子だけでは到底間に合わず、多くの方々に立って聴いていただくことになり申し訳なく思いました。

アンケートには、非常に好評で今後もコンサートの継続を希望する声がたくさんありました。音楽向けに作られた施設ではありませんが、「木造で天井が高く、吊るし電燈など古風な雰囲気が洋楽にもよく合っていた」「演奏者と聴衆の距離が近くて親しみやすく聴けた」「静かで建物にマッチした趣深いコンサートで心が安らぎました。」等の有難い感想をいただき、開館記念事業としてのコンサートを盛大に終えることができました。